

宝ほう

瓶へい

横地清恵

子島曼陀羅の虚空藏に有る、古祥宝瓶宮(胎藏図像)↓瓶宮(胎藏旧図様)↓賢瓶(現図)である。野尻抱影氏は、鎮星の真下にあたる宝瓶宮などは、西方の水瓶から唐風の華麗な壺に変わって、左右に赤いリボンを下げていることを述べておられる。この、固定化されない自由な動き(冠上に日月頭飾、布帛が翻るリボン)のイラン的要素を辿ってみようと思う。現図曼陀羅から、遡上さかのぼって、胎藏図像へ、賢瓶、瓶宮、古祥宝瓶宮と、その重大さを知った時、何故に、西では、イエスを賞し、(オリーフ山)上で、予言と忠誠を語り合う箇所、「その時、水瓶を携えた人が、その曲がり角を横切って歩み、人の子のしるしと印が東天に現われるであろう。この時、賢き者は、頭かぶをあげ、世の救いの近いことを知るであろう。」と、エルサレムの滅亡と、新しい復活を予言し、リバイのアカシヤ記録に出てくる如き、双魚宮より宝瓶宮時代ほうびんぐうじだいに

変わったことを知らせ、イエスの偉大な教訓が、多数の人々に了解され)何故に、東では、その宝瓶が普賢菩薩に並ばせられているのだろうか。リボン結びが、イラン風とは、どういう意味だろうか。「胎藏図像」が、インドから、支那、そして、日本へと入って来る迄に、ずっと多く、イランの国を通してというが、先の例のみならず、肝心な瓶びんその物が、正倉院御物として、三世紀のササン朝ペルシャ時代を証していることで、明瞭であろう。この原稿で、宝瓶を取り扱った時、仏画、聖書に描かれている過程を、イランから記述してみた。シユルンベルシュのいう「古代ギリシヤ美術の非地中海の後裔」は、ギリシヤ・ローマ美術のイラン風またはイラン化されたものであり、その範囲は、ユウフラテス川以来、カニシカ王が、かつて君臨したインドのガンジス平原におよぶものである。それは、たんにパルティアとクシヤン

王朝との美術の類似点が、みられるというのみならず、ローマ帝国の東洋風な美術、いわゆるギリシャ・仏教美術と『ミスラ』の彫刻などの中にも同様に、イラン風なものの痕跡が観取される⁽¹⁾。

国情による、政權交替と、諸国の入り乱れ、宗教的まどめに基づく、教典の別読み等、諸要素が、その様な遺跡の原因だろう。ところで、キリスト教、仏教、ゾロアスター教、マホメット教が交流して、中国では唐代の密教界に、大きな動きが、始まって、それが、我が国に請来された時、奈良南都六宗とは異なった仏教界大變動を、みたのである。吉祥宝瓶宮・双魚宮↓瓶宮・魚宮↓二魚・寶瓶という變化を並んで辿り来る時、双魚宮から、宝瓶宮へのイエス・キリストの復活が予言されて成就したという奇蹟が、我が国では、平安時代に採用されたところに、支那の、無限循環の相において、歴史の受け取り態度を決めていることを知る。

(一) 「イラン」黒柳恒男著 六二～六三頁

(よこち・きよえ、日本仏教美術史、北園高校)